

岡山大学

埋蔵文化財調査研究センター報
第 9 号

1993年 3月 発行

岡山大学
埋蔵文化財調査研究センター

〒700
岡山市津島中3丁目2番1号
☎(086)251-7290



古代の条里と水田

田んぼの畦を1辺109mほどの正方形に区画(1町)し、条・里・坪の整然とした地番づけをもつ水田を条里制水田と呼んでいる。古代の班田収授の制度とのかかわりで、大化以後、遅くとも奈良時代には広く普及していた水田のあり方と推測されてきた。近年、発掘調査の増加で、現地表にのこる条里制水田の水路の下を調査する機会がふえた。大和盆地のような古代の中心地域でも、掘ってみるとどうも多くは古代末期から中世頃までしか遡らない。また平安時代の浅間山の爆発で埋もれた群馬県高崎市大八木の条里制水田の調査では、1町の中を10等分(1反)ではなく、100等分を基本にして小畦を配置するという意外な変化があることなども判明した。一方、大阪平野では8世紀か7世紀後半まで遡る例が認められるという。岡山平野では、さらにはやい時期に条里制水田に先行する方格子割りの水田があった可能性を追跡中である。条里制水田の歴史はそう単純ではなさそうだ。

今日まで生きのこっていた水田の地割りが、いつ、いかなる目的で、いかにして出現したのか、文献史学・考古学・歴史地理学・土壌学・古植生学などの協力で解きあかしていくべき興味深い課題といえよう。(センター長 稲田孝司)

∞∞∞∞∞旭川西岸の条里について∞∞∞∞∞

旭川西岸の平野は、条里制の地割がよく残っていることで早くから有名である。また、「金山寺文書」の中には、伊福郷高山里、津嶋郷楠本里などの地名が見え、文献からも条里の様子がうかがえる数少ない地域である。

考古学的には、1968・9年の津島遺跡(総合運動場)の調査で、条里の施行に関係するとみられる大規模な整地の跡などが確認され、全国的に注目された。その後、津島構内以外にも、中溝遺跡(学南町)、南方釜田遺跡(南方)で条里関連の調査が行われ、特に南方釜田遺跡では、奈良時代にさかのぼる可能性のある条里地割りが発掘された。全国的に貴重な例であり、正式報告書の刊行が待たれている。

旭川西岸の条里は、大まかに見て、北は半田山の麓から南は旧2号線のあたりまで及んでいたようだ(図2)。しかし、細かくみると、かなり複雑な様相を示す。南方釜田遺跡の調査では、古い時期の条里地割りは、古墳時代以前の微高地部分には及ばなかったことがわかっている。津島構内の地籍図を見てもほぼ同様の見解が得られる。図3を見ると、条里地割りを行った部分もあるが、まったく異なった方向のものなどもある。条里地割りではない部分は、それ以前の安定した微高地にあたると思われる。南方釜田遺跡では、中世以降には、条里地割りが微高地部分にも及んでいるが、構内では近代まで微高地に及ばなかったようだ。

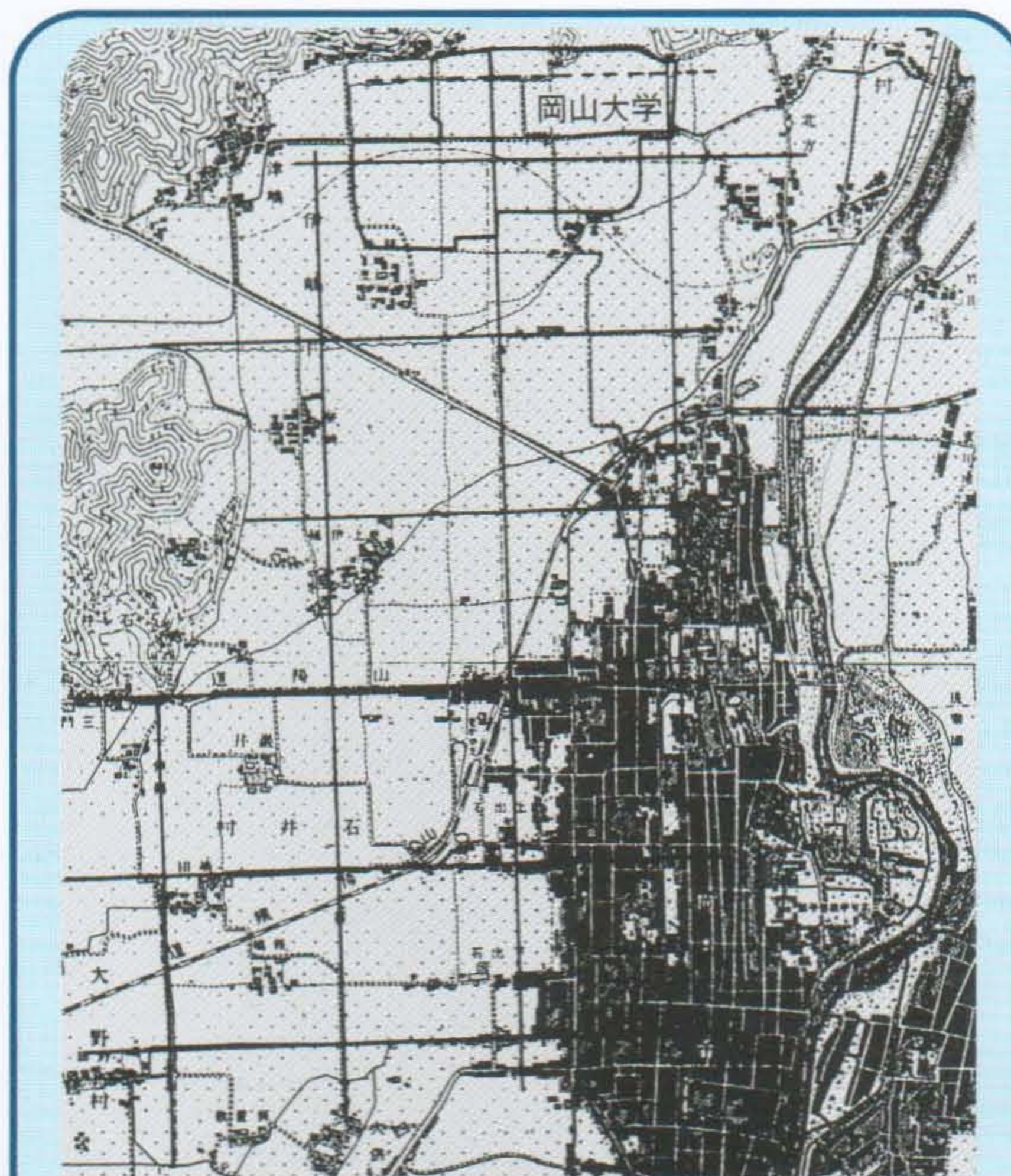


図2 岡山平野の条里

一之坪、二之坪などの地名から推定される里境を示した。特に、大学前の南北道路を通るラインは、もっとも基準となるものである。

条里制の施行は、土地開発にとって大きな画期だったが、基本的には、弥生時代以来の水田地帯である低湿地の開発が中心で、微高地や強湿地へは、中世以降の新田開発を待たねばならなかった。そういう意味で、条里制は、弥生時代以降脈々と続いてきた水田開発の進展の延長上に位置づけられるだろう。(助手 土井基司)

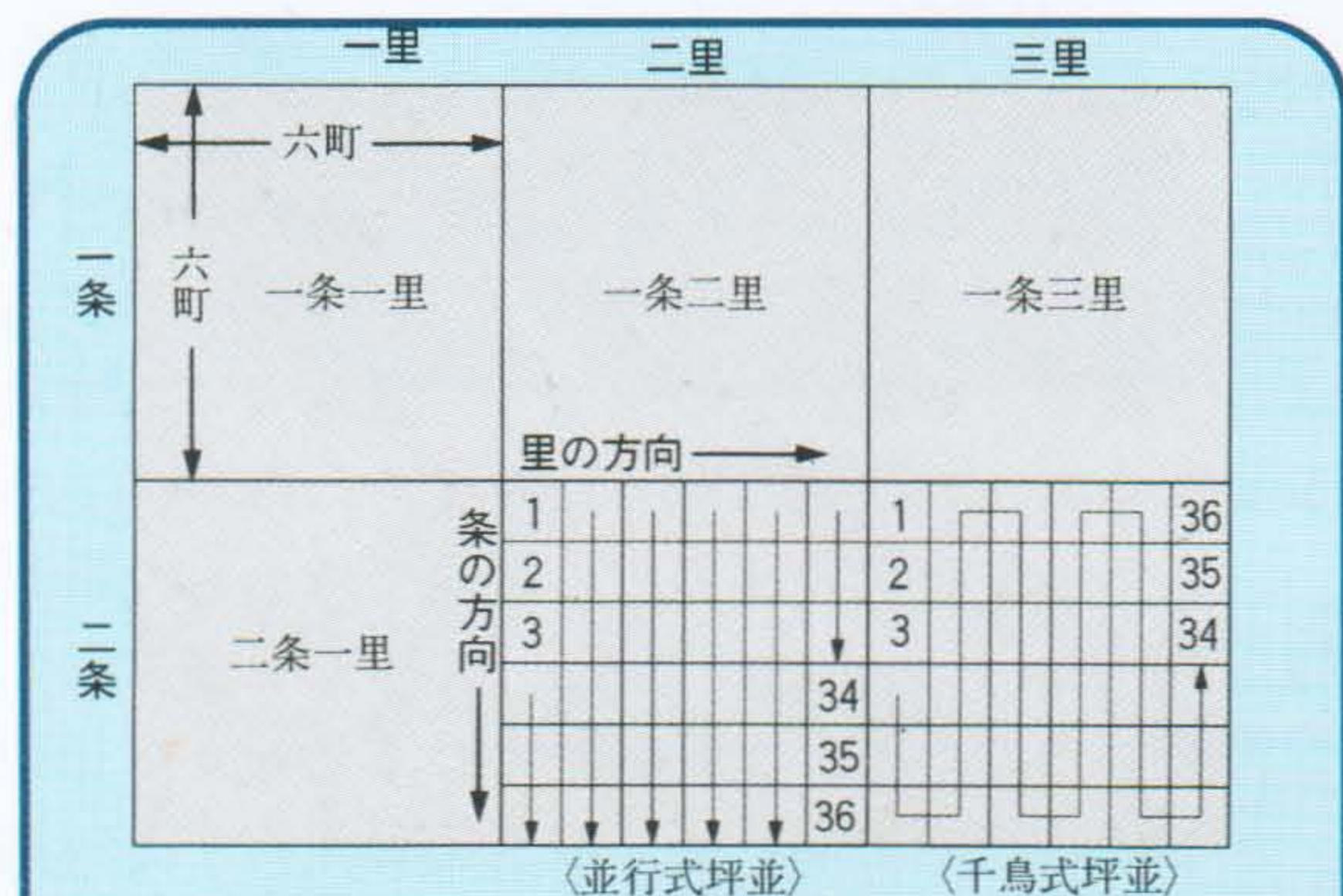


図1 条里模式図

条里制は、1辺が6町(654m)の正方形の土地=里を基準に、それを各辺6等分して、1町(109m)の方形区画=坪を36個つくる。一般に、○郡○条○里○之坪というふうな地番表記に利用する。坪の数え方には千鳥式と並行式がある。

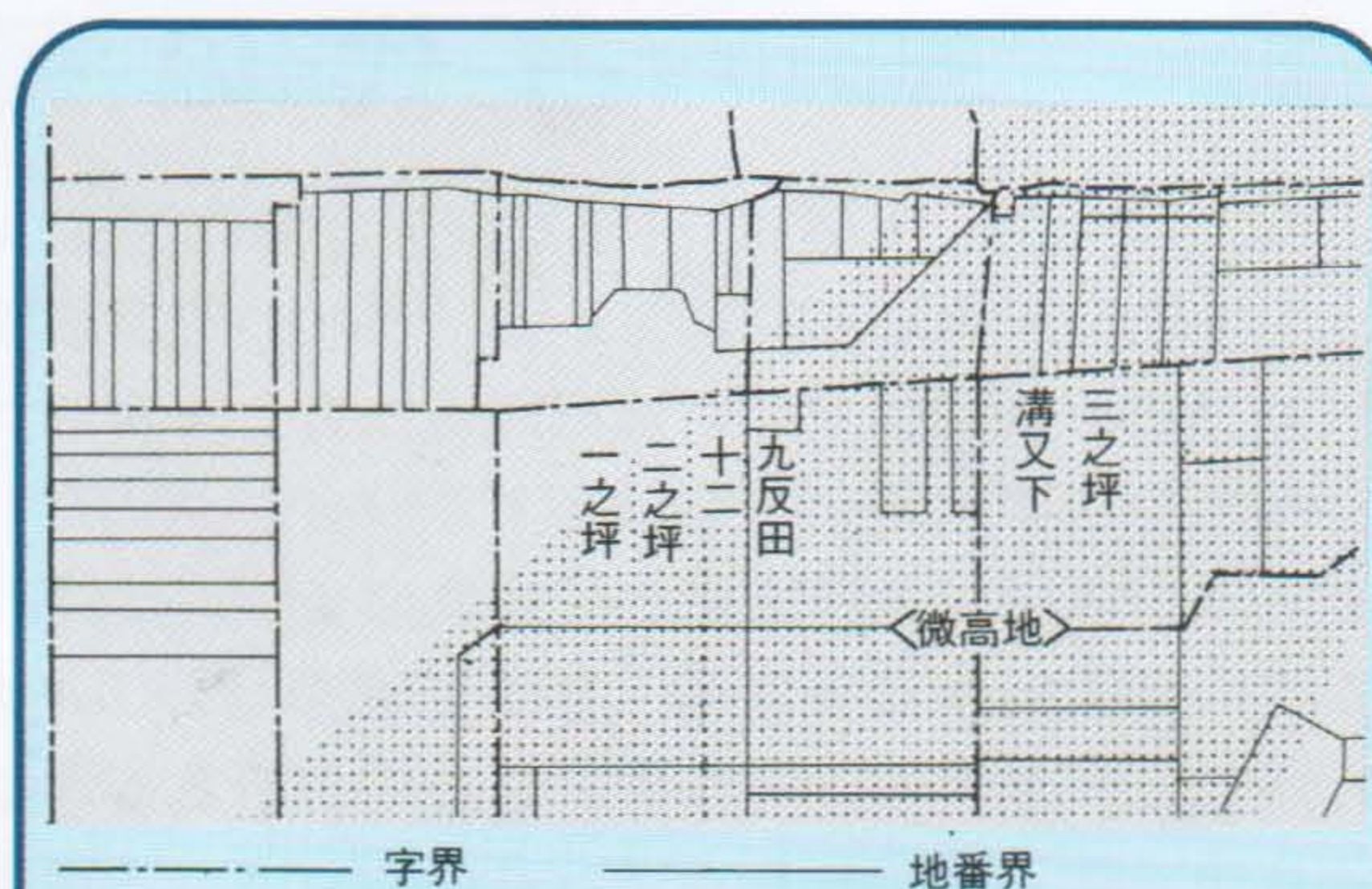


図3 津島構内地籍図(教養部から事務局周辺)

地割りのラインが2本、ほぼ平行して北東から南西に向け走っている。それに挟まれた部分が微高地と推定される。発掘調査で一部確かめられている。

◇ ◇ ◇ 津島キャンパス内の条里関連遺構 ◇ ◇ ◇

岡山大学津島キャンパスでは、近年の発掘調査から条里関連遺構が数カ所で検出されている。

最初に調査の手が入ったのはA地点である。1982年度に学内の基幹整備に伴って行われた調査で、東西方向に走る溝の存在が確認された。ここでは調査面積が狭小であったため、条里関係（坪境）の可能性を指摘するにとどまっていた。その後、B地点の調査でも幅7m以上、水利施設として多数の杭が流れに直交して打ち込まれた東西方向の規模の大きな溝が発見された。その位置は、かつてのA地点の調査で認められた溝につながり、坪境の溝であることが想定された。調査区の東端部分では南北の里境と考えられる溝も確認されている。さらに、A・B両地点の間に位置するC・D地点の調査でも同一ライン上に類似した溝が検出され、A地点からB地点へ延々700m以上も続く坪境の溝の存在が確定的となった（図4）。特にC地点では、幅12m前後の溝の中に高低差をつけたり（写真2）、流れに直交する杭列や護岸的



写真2 C地点溝（東から）

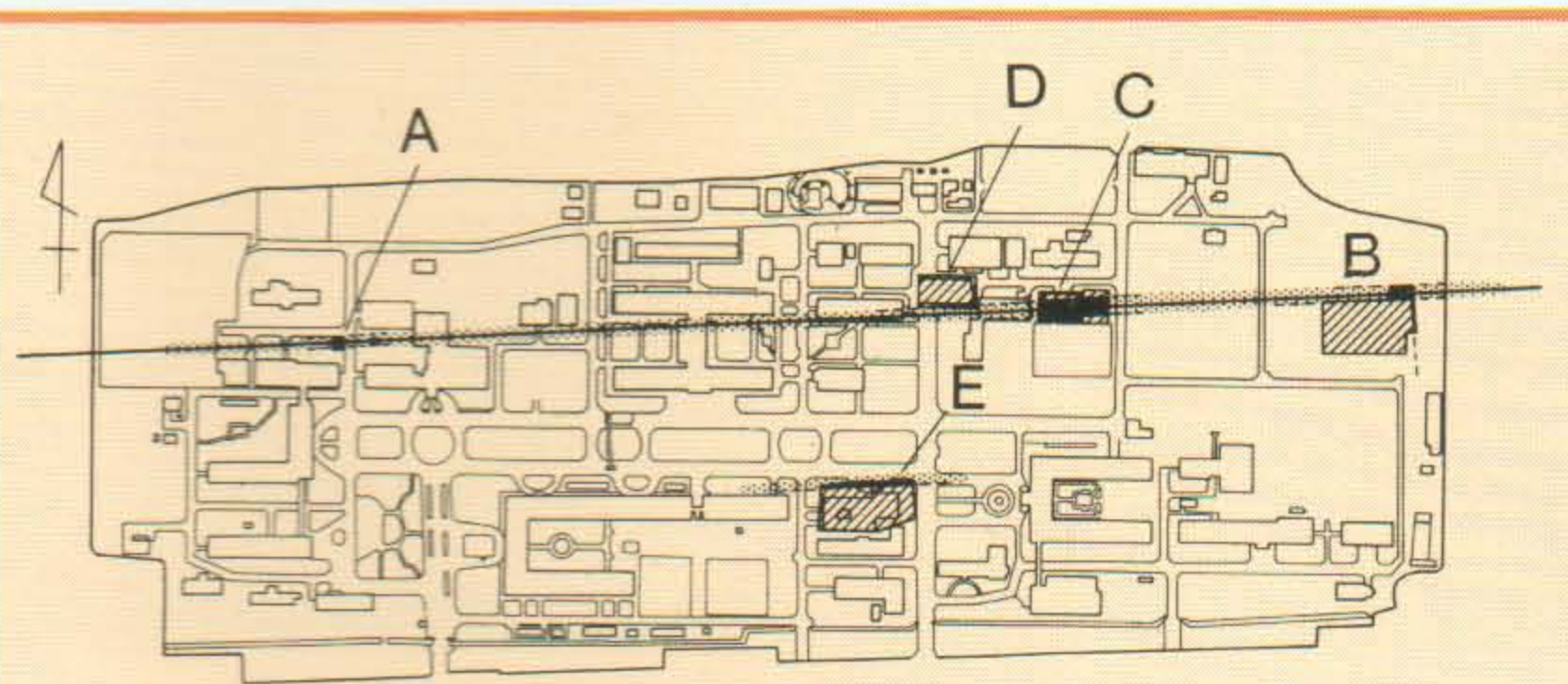
幅12mの平安時代の溝の中には、白線のように高低差のある溝（主水路と副水路）が走り、水利施設の杭も認められる。



左：取水口と杭列（東から）

右：直交杭列と遺物出土状況（北から）

写真3 C地点溝内水利施設



A：一次調査地点(NP.1) C：6次調査地点(工学部生物応用工学)
 B：3次調査地点(男子学生療予定地) D：7次調査地点(工学部情報工学)
 E：5次調査地点(自然科学研究科)

図4 津島北地区条里関連遺構調査位置図



写真1 D地点溝・水田（東から）

平安時代の溝と水田である。調査区南端に坪境の溝が検出されている。

役目の杭列、あるいは水の取水口などが検出され（写真3）、当時の水利調節に対する工夫をかいまみることができる。B・D地点ではこの溝に沿った水田区画も検出されている（写真1）。そのほかに、E地点ではこの溝から南に約110mの地点ではほぼ平行する同様の溝が一部確認されている。

こうした遺構は平安時代の遺物を伴うものが多く（写真4）、この段階には広範囲に条里制が施行されていたことが予想される。それ以前ではC・D地点で7世紀に遡る東西方向の直線的溝あるいは方形区画の水田が検出されているが、その広がりには現状ではまだまだ不明確な部分が多く、今後の調査に期待が寄せられる。（助手 山本悦世）



写真4 C・D地点溝出土遺物

◆◆◆最近の発掘調査から◆◆◆

津島岡大遺跡第9次調査（工学部生体機能応用工学科棟予定地）

津島キャンパスでは9度目の発掘調査が、昨年7月から本年1月までの約7ヶ月間にわたり、工学部生体機能応用工学科棟の建設に先だって行われた。今回の調査では、縄文時代から明治時代までの各時代の人々の生活の跡が発見され、大きな成果を挙げる事ができた。

この付近は弥生時代前期以来、耕地として利用されており、各時代の水田や畑、水利施設の跡が見つまっている。その中でもとくに目を引くのが、7世紀初め頃の直線的な東西溝2条と、平安時代



写真5 古代の大溝

東西方向に延びる幅約10m、深さ1m以上の大規模な溝である。杭（白丸で囲んだ所）を利用して水かさを上げ、副水路や取水口から耕地に導水する。



写真6 縄文時代の貯蔵穴

斜面に径1m前後、深さ数10cm～1m以上の穴を掘り、ドングリ等を水漬けの状態にして保存した。

の後半頃に掘られた巨大な溝である(写真5)。前者は、先進地帯における条里施行以前の計画的な大規模土地開発の様子を窺わせてくれる。後者は、古代の土地区画整理事業ともいべき条里制の一環として掘削されたものであろう。幅約10m、深さ1m以上で東西を指し、要所に杭を打って取水施設を設けたあり様は、条里制施行が多大な労力と技術を投入した国家的事業だったことを物語る。

さらに遡って縄文時代には、この場所を、北東から南西に谷が横切っていた。その斜面や底から、縄文人が食料を貯蔵するために掘り込んだ径1mほどの穴(貯蔵穴)がたくさん見つかり(写真6)、ドングリや編物が当時のままの姿を現した。

数千年間にわたる人々の営みを、今回の発掘調査でも克明にたどることができた。彼らの生活の息吹や流した汗の跡は、意外なほど生々しい形で、私たちの学び舎の下に埋もれているのである。

(助手 松木武彦)

速報 !!

本部事務局第2会議室の一角に簡単な展示コーナーができました。鹿田地区と津島地区のコーナーがあります。現在は上記の調査に関連した遺物を展示しています。会議室ご利用の折などにご覧いただければ幸いです。

表紙写真説明 男子学生寮予定地(図4-B地点)の古代(9～10世紀)の水田を西から望む。東西南北の畦で区切られた略方形の水田が広範囲に広がる。写真左側には条里の坪境を走る東西溝が見える。

編集後記 センター報も号を重ねてネタが尽きてきました。今号をご覧になって、「以前も同じような…?」とお思いの方も多いでしょう。いいアイデアがありましたら、是非ともお教えてください。(土)